

3. 麻しんの治療

麻しんに対する特效薬はなく、発熱やせきなどの症状をやわらげる対症療法を行いながら回復を待つこととなります。その間に、合併症として細菌感染症にかかってしまった場合には、抗菌薬（抗生物質など）が使われることもあります。抗生物質は麻しんウイルスそのものには全く効果がありません。

麻しんは、様々な重篤な疾患を合併しやすいことも特徴ですが、肺炎を合併すると入院が必要になる場合がほとんどです。肺炎にも、麻しんウイルスによる肺炎の場合と細菌による肺炎の場合とがあり、細菌性肺炎に対しては抗菌薬（抗生物質など）が効きますが、麻しんウイルスによる肺炎に対しては特異的な治療はなく、重症の場合、人工呼吸器を装着してICU（集中治療室）での管理を要することもあります。

また、重篤な合併症として脳炎がありますが、脳炎はさらに重篤で、けいれんが起こったり、意識がなくなることもありますので、ICUで長期間におよぶ集中的管理を要するものと考えておく必要があります。

2000年に大阪で麻しんが流行した時の調査によると、麻しんにかかった人のうち、約40%の人が入院をして治療を受けていたようです。

4. 風しんについて

(1) 風しんの特徴

風しんも麻しんと同じウイルスによる感染症です。風しんは「三日ばしか」とも呼ばれます。「はしか：麻しん」と「三日ばしか：風しん」を混同している人が多くいますが、この2つは全く別の疾患です。「三日ばしか」にかかったことがあっても、「はしか」の免疫をもっていることにはなりませんし、「はしか」にかかったことがあっても、「三日ばしか」の免疫をもっていることにはなりません。

風しんの場合も、患者のせきやくしゃみのしぶき（飛沫）に含まれるウイルス粒子を吸い込むことによって感染しますが、感染力は麻しんより弱いと言えます。風しんウイルスが体の中に侵入すると、風しんに対する免疫がない人では、14～21日（平均16～18日）の無症状の期間（潜伏期）を経て、発熱と発しん（赤いぶつぶつ）があらわれます。発熱は約半数にみられますが、37℃台の微熱程度で終わることも多く、麻しんに比べるとかなり軽いといえます。発しんは全身に広がりますが、麻しんよりその色は淡く、3日程度で消えてしまいます。また、首や耳の後ろのリンパ節（首のまわりのぐりぐり）が腫れて、3～6週間位続くことも特徴的です。発熱と発しんは通常は数日で治ってしまうので、「三日ばしか」とも呼ばれるゆえんです。風しんでは、せきや鼻水、目が赤くなるといった症状も出ますが、麻しんに比べると軽いです。発熱と発しんとリンパ節の腫れが風しんの代表的な3症状ですが、3つともそろわないことが多くあります。また、全く症状が出ないことも15%くらいあります。典型的な症状がそろわない場合や、周りで流行が起こっていない場合は、溶れん菌感染症やりんご病（伝染性紅斑）といった、他の疾患と間違われることもあります。

風しんの患者から風しんウイルスが排泄されている期間は、発しんが出現する前後約1週間と言われていますが、熱が下がると急速に感染力は弱くなります。